

# 音のない世界と、音のある世界をつなぐために ーユニバーサルデザインで世界を変えたい！

松森果林

## 聞こえる世界から聞こえない世界へ

### 【強みは聞こえないこと】

小学四年で右耳が聞こえないことに気づき、中学から高校にかけて左耳の聴力も少しずつ失いました。「聞こえる世界」「聞こえない世界」その間の「聞こえにくい世界」、三つを実体験して分かったのは、社会は聞こえる人の暮らしやすさや、障害のない人を前提にして作られているという事です。でも、聞こえない私たちや、だれにとっても暮らしやすい社会であることが大事ですよ。

ユニバーサルデザインとは、すべての人々が使いやすく利用しやすい商品、建物、サービス、環境や社会をつくっていくことをいいます。自分の実体験から得た知見をもとに、ユニバーサルデザインのアドバイザーとして分かりやすい情報の伝え方、利用しやすいモノ、サービス、社会づくりのアドバイスや講演、執筆等をしています。

### 【少しずつ聞こえなくなるということ】

小学校から高校時代まで、少しずつ聴力を失いました。朝起きるたびに、声を出して聞こえるか確認をする不安な日々。昨日までは目覚まし時計の音で目覚めていたのに、今日は聞こえず寝坊してしまったなど、前夜までは確かに存在していた音が、今日はないと気づくことへの漠然とした恐怖感。

### 【11歳の決意】

聞こえないことでのイジメや冷やかし、「つんぼ」と言われたときの心の傷は深く、この先自分を守るために「聞こえないことは絶対に隠していこう」と決心。「聞こえるフリ」をすることを選んだ私は、周りに合わせて笑い、聞こえていないのになづき、自分を偽りごまかし続ける日々でした。自分らしさなんてどこにもなく、ただひたすら「みんなと同じく」するための不毛な努力に一生懸命でした。

### 【全ての音が消えた日】

いつか聞こえなくなるという不安が現実となった高校二年の冬。水の音も、風の音も、音楽も、弟や妹、両親が私を呼ぶ声も。まるで無声映画のようです。何をしてもどうしても聞こえるようにはならないという絶望感がありました。

### 【専門学校二校から聞こえないという理由で受け入れ拒否】

「日本という国は障害者になっただけで、一人では何をするのも大変な国だったんだ…」そう思った17歳。生きている意味が分からず、死ぬことばかりを考える日々でした。

### 【常に相手の立場にたち、寄り添ってくれた両親の言葉】

「お前の涙を見ていると、いっそのこと、お父さんたちも耳が聞こえなければと思う。できることならば変わってあげたい。でも、お父さんが同じ立場だったら絶対に乗り越えるぞ！」

これ以上どう頑張ったら良いのか分からない、そんな私を支えた、大切な言葉です。

【人生の途中で聴覚を失うとは】

身体の機能の一部を失うだけでなく  
「コミュニケーション」と「あらゆる音声情報」を失うということでした。  
築き上げてきた人生、生き方、周囲との関係、生活、すべてが変わることでありました。

【三つの世界を17年間で経験】

聞こえる世界。  
聞こえない世界。  
聞こえるときもあれば聞こえないときもある中途半端な世界。  
父の言葉はいつもあたたかくて。  
「人が何年かかってもできない経験を17年間でできた。それは必ず将来につながる」と。

【筑波技術短期大学、手話との出会い】

進路で悩んでいる時、偶然見た新聞記事「日本初の視覚・聴覚障害者のための国立大学」。  
大学進学なんてムリだよ、とあきらめつつも学校見学に行き、目にしたのは「手話」。  
当時、聴覚障害教育開発センターコミュニケーション指導担当として対応して下さった  
大沼直紀先生の手話にくぎ付けに。帰り道では「絶対にこの大学に入る！」

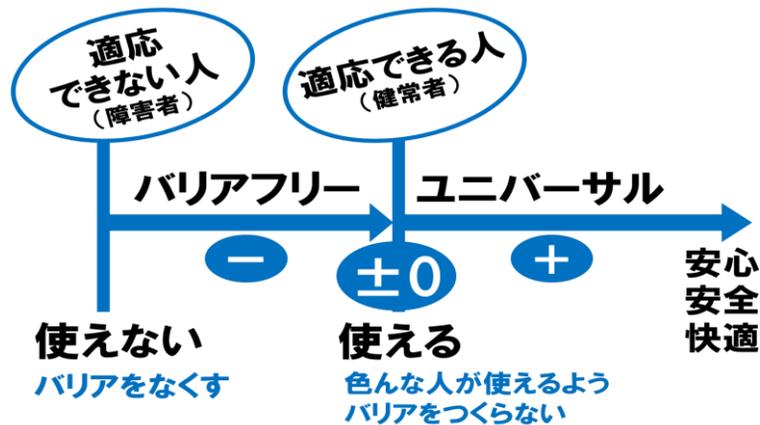
【障害受容のきっかけは、自分以外の聴覚障害者を知ったこと】

筑波技術短期大学で、聴覚障害者がどのように生活し、コミュニケーションをとり、社会  
で活躍しているかを見て、「聞こえない自分」として人生を再構築することができました。

② ユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインとは、すべての人々に対し、年齢や能力に関係なく、改造をすることなく、特殊なものでもなく、可能な限り最大限に使いやすい製品や環境のデザイン

- バリアフリー** バリアをなくしていく（障害のある人を対象とした障壁除去）
- ユニバーサルデザイン** 多様な人を対象とし、最初からバリアをつくらない考え方



図参考:「ユニバーサル・デザインの仕組みをつくる」(学芸出版社) 川内美彦

【バリアを作らない社会を】

情報伝達デザインを専門とする恩師の「聞こえないことで被る不便さは、バリアを生む社会システムに問題がある」という指摘に目からうろこ。  
「常に問題意識をもち、それに対する解決方法を提示すれば、実現できる。」

## ②「東京ディズニーランドを10倍楽しむための提案」きっかけの講義

聞こえないと楽しめない課題を整理し、(株)オリエンタルランドに提案をプレゼンする授業。最終的にいくつも提案が実現しました。

- ・手話ができるキャストは100人以上！筆談もできるよ。
- ・指をさせば会話ができる「指差しコミュニケーションブック」
- ・アトラクションの内容を事前に得られる「ストーリーペーパー」
- ・アトラクションの音声が表示される「字幕表示システム」
- ・ショーは手話で表現すれば伝わる！TDSの「手話パフォーマー」
- ・建物や乗り物、キャラクターの形が触って分かる「模型」
- ・車いすでも近づけて、親子が自然と向き合える「水飲み場」等々



## ③公共施設のUD事例：羽田空港国際線旅客ターミナル

【重要なのは当事者参加型】

建設前から、車いす利用者、視覚・聴覚・知的・内部障害者、妊婦さん、外国人など、約40名が二年半で約40回、使いやすい空港にするための議論を繰り返しました。

【聴覚障害者にとって大切なのは、音声情報が視覚的にも分かる】

- ・音声アナウンスは文字表示（非常事はすべてのモニターで四か国語表）
- ・トイレの個室には「非常時用フラッシュライト」。非常呼び出しボタンにも一工夫。
- ・エレベーターには聴覚障害者が閉じ込められたことを伝える「聴覚ボタン」
- ・エレベーターは外部とのコミュニケーションを確保するためにシースルー。
- ・案内カウンターには手話のできるコンシェルジュやTV電話による手話通訳サービス。
- ・筆談ボード、コミュニケーション支援ボード、磁気ループの完備 等々

## ④聴覚障害は「情報障害」と「コミュニケーション障害」

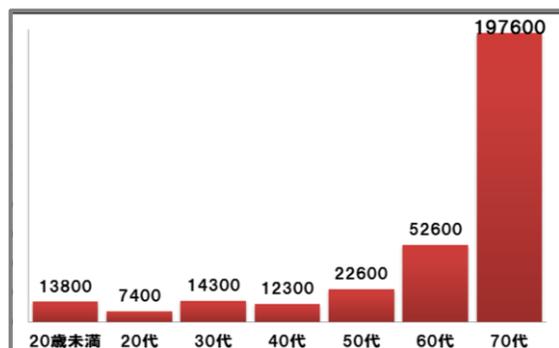
【聞こえにくい人は6人に1人】

聴覚障害者（身障者手帳保持者）：約32万4千人

（平成25年厚生労働省「平成23年生活のしづらさなどに関する調査結果」による）

身障者手帳を保持しない難聴者：19,440,000人。

障害の状態は一人一人違い、コミュニケーション方法も、手話、筆談、口話、補聴器、人工内耳等様々です。加齢による難聴者が増えています。



## ⑤情報のUD：テレビCMにも字幕を！

【番組への字幕は増えており、視聴時間も増えている】

- NHK（総合） →84.8%
- 在京キー5局 →95.5%
- 在阪準キー4局 →94.1%

総務省：「平成25年度の字幕放送等の実績」  
「視聴覚障害者向け放送普及行政の指針」の  
普及目標の対象となる放送番組における字幕番組の割合

【民間放送の約18%を占めるCMには字幕がつかない】

CMは商品やサービス、企業の良さをアピールし、売り上げにつなげる最強の宣伝メディアなのに、約二千万人もいる聞こえない人たちに届いていないという事実。

CMにも字幕をつけて！と提案をして18年！

【2010年からトライアル放送開始】

パナソニックとTBSが日本初のトライアル放送、その後少しずつ理解を示す広告主が増えてきました。これまでに16社がトライアル放送にチャレンジしています。2014年、総務省がCM字幕検討会を立ち上げ、民放連や放送局、広告主等関係者が連携をとり、国の検討事項になりました。CMに字幕がつくことは完全なる社会参加のひとつなのです。

【100回言ってダメでも101回目は何かにつながるかも！】

「聞こえる人と同じ情報がほしい」そんなにわがままを言ってるつもりはないけれど、当たり前が当たり前になるのがこんなに難しいなんて（笑）

**聞こえない子育て、手話を通した近所づきあい**

【手話言語条例】

手話を正式な「言語」と認め、手話を学び、手話で学べるなど、日常生活の中で手話が使いやすい環境整備の推進を制定。一昨年、鳥取県が日本で初めて制定し、群馬県、神奈川県、その他様々な都道府県や自治体で広がりを見せています。

【手話が楽しめる環境を作っていこう！井戸端手話の会】

ママ友達同士の井戸端会議を手話でできるようにしようと立ち上げ、毎週一回集まって13年目。母親から子どもへ、子どもから学校へ、学校から地域へと広がる手話の輪。聞こえなくなっただって子育てはオモシロい！

**「多様性」を認め合える「寛容性」をもてたら**

【障害は環境が作る】

誰もが安心して自分らしく、楽しく暮らせる環境や、誰に対しても分け隔てなく接する心が育っていけば今よりもっと温かい、ユニバーサルな社会になるのではないのでしょうか。

【おたがいさま！だから共に生きている】

聞こえる人たちは「聞こえない人とのコミュニケーションは難しい」と言います。でも立場を逆にすると「手話ができない人とのコミュニケーションは難しい」ということ。聞こえないからコミュニケーションできないのではなく、聞こえる人がコミュニケーション方法をもたないからバリアがある、と考えることもできるのです。つまり「お互いさま」。人それぞれできることとできないことがあり、それらを補うために私たちは「共に生きて」いるのだと思います。

松森 果林 <ユニバーサルデザインアドバイザー、内閣府 障害者政策委員会 委員>

小学四年から高校時代にかけて聴力を失う。

大学卒業後、株式会社オリエンタルランド勤務を経て、現在は聞こえる世界、

聞こえない世界両方を知る立場から、UD普及活動、執筆、講演等を行う。

香りマーケティング協会顧問、NHK「ワンポイント手話」MC。

東京国際空港国際線旅客ターミナルビルユニバーサルデザイン検討委員。

一児の母、自宅マンション内では「井戸端手話の会」を主宰。

著書に『音のない世界と音のある世界をつなぐ～ユニバーサルデザインで世界を変えたい！』

（岩波書店）『誰でも手話リンガル』（明治書院）『星の音が聞こえますか』（筑摩書房）

★ブログ：<http://d.hatena.ne.jp/karinmatasumori/>

★フェイスブック：<https://www.facebook.com/MatsumoriKarin>

